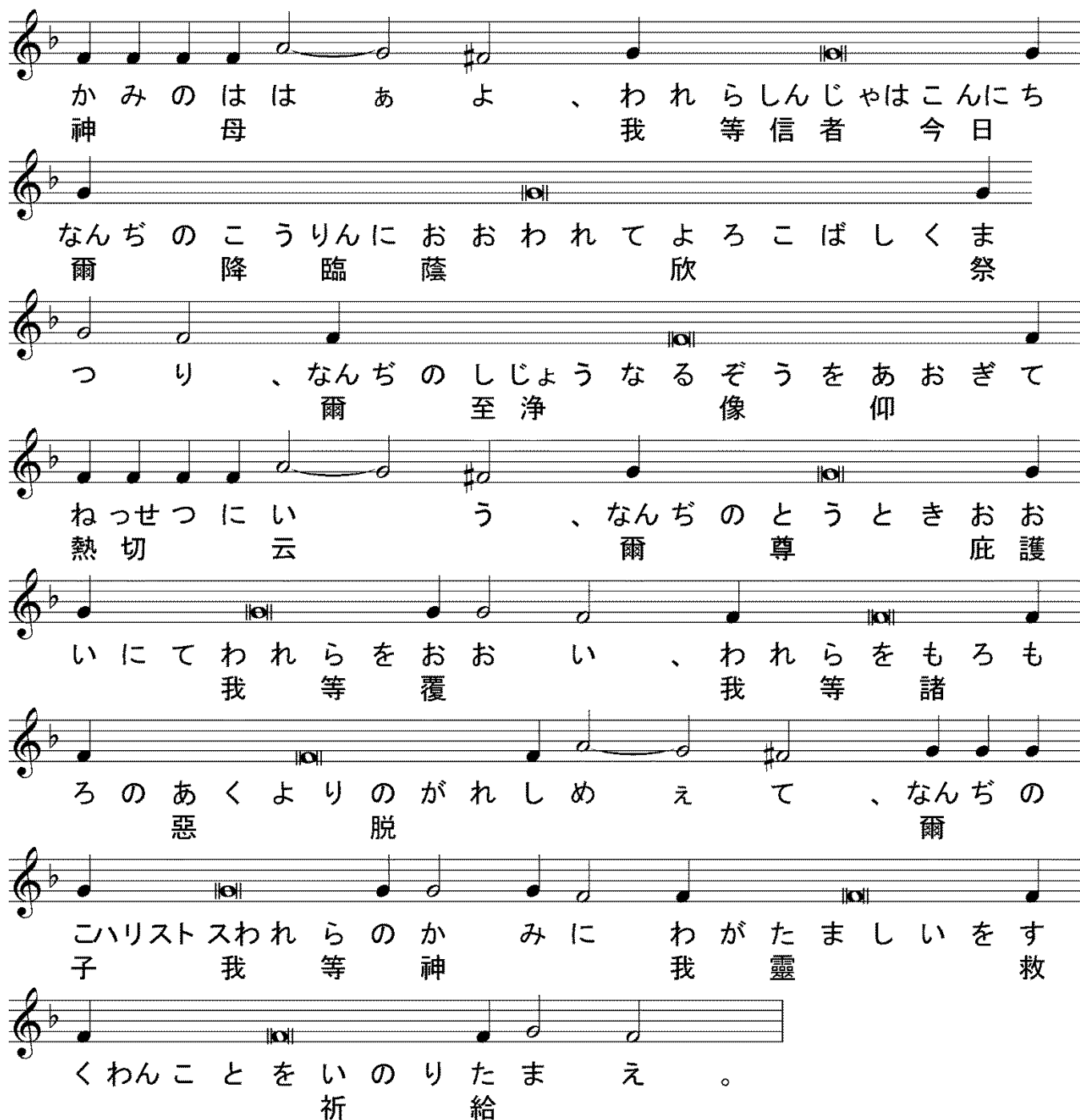


【 生神女庇護祭のアポリティキオン 第4調 】



かみのははあよ、われらしんじゃはこんにち  
神母我等信者今日

なんぢのこうりんにおおわれてよろこばしくま祭  
爾降臨蔭欣祭

つり、なんぢのしじょうなるぞうをあおぎて  
爾至淨像仰

ねっせつにい、う、なんぢのとうときおお  
熱切云爾尊庇護

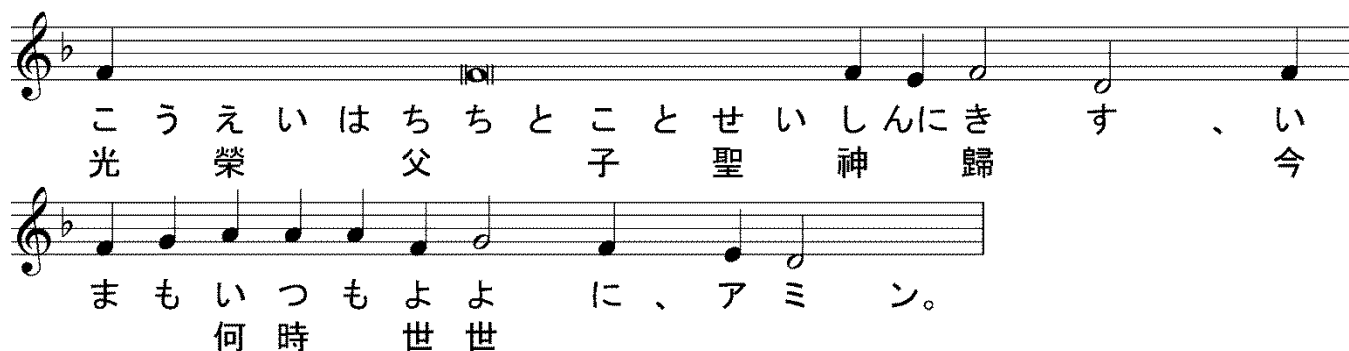
いにてわれらをおお、い、われらをもろも  
我等覆我等諸

ろのあくよりのがれしめえ、て、なんぢの  
悪脱爾

こハリストスわれらのかみにわがたましいをす  
救子我等神我靈救

くわんことをいのりたまえ、。  
祈給

【 生神女庇護祭のコンダキオン 第3調 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、い今  
光榮父子聖神歸

まもいつもよよに、アミン。  
何時世世に、アミン。



こんにちしょうしんぢよはせいどうにたちて、せい  
 今日生神女聖堂立 聖  
 いじんのかいとともに見えずして、われら等  
 人会借見 我等  
 のためにかみにいのりたもおう。しよ  
 爲神祈給 諸  
 てんしはしさいちょうらとともにふくはいし、  
 天使司祭長等借伏拜  
 しとはよげんしゃとともにけいがす、しょうしんぢよ  
 使徒預言者借慶賀 生神女  
 がわれらのためにえいえんのかみにいのり  
 我等爲永遠神祈  
 たまあえばなり。  
 給

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> 悉くの天軍より伏拝せられ、<sup>ばんぶつ む ゆう</sup> 萬物を無より有と  
<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、<sup>ばんぶつ む ゆう</sup> 爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 罪を行う者を棄てずして、<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> を立て、<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> 我等卑しくして不当なる爾の諸僕を、<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> 此の時に於ても、<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> 爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> 爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 我が靈と體と

<sup>せい</sup>を<sup>せい</sup>に<sup>われら</sup>し、<sup>しょうがいぜんこう</sup>我<sup>もつ</sup>等<sup>なんぢ</sup>に<sup>つと</sup>生<sup>え</sup>涯<sup>たま</sup>善<sup>せい</sup>功<sup>せい</sup>を<sup>せい</sup>以<sup>せい</sup>て<sup>せい</sup>爾<sup>せい</sup>に<sup>せい</sup>務<sup>せい</sup>む<sup>せい</sup>る<sup>せい</sup>を<sup>せい</sup>得<sup>せい</sup>せ<sup>せい</sup>し<sup>せい</sup>め<sup>せい</sup>給<sup>せい</sup>え、<sup>せい</sup>聖<sup>せい</sup>なる  
<sup>しょうしんぢょ</sup>生<sup>こせい</sup>神<sup>なんぢ</sup>女<sup>よろこび</sup>と<sup>な</sup>古<sup>しよせいじん</sup>世<sup>きとう</sup>より<sup>よ</sup>爾<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>喜<sup>よ</sup>を<sup>よ</sup>爲<sup>よ</sup>し<sup>よ</sup>し<sup>よ</sup>諸<sup>よ</sup>聖<sup>よ</sup>人<sup>よ</sup>と<sup>よ</sup>の<sup>よ</sup>祈<sup>よ</sup>禱<sup>よ</sup>に<sup>よ</sup>依<sup>よ</sup>り<sup>よ</sup>て<sup>よ</sup>な<sup>よ</sup>り、 )

<sup>けだしわ</sup>司<sup>かみ</sup>祭<sup>なんぢ</sup> 蓋<sup>せい</sup> 我<sup>われら</sup>が<sup>こうえい</sup>神<sup>なんぢ</sup>よ、<sup>せい</sup> 爾<sup>せい</sup> は<sup>せい</sup> 聖<sup>せい</sup> な<sup>せい</sup> り、<sup>せい</sup> 我<sup>せい</sup> 等<sup>せい</sup> 光<sup>せい</sup> 榮<sup>せい</sup> を<sup>せい</sup> 爾<sup>せい</sup> 父<sup>せい</sup> と<sup>せい</sup> 子<sup>せい</sup> と<sup>せい</sup> 聖<sup>せい</sup> 神<sup>せい</sup> に<sup>せい</sup> 献<sup>せい</sup> ず、<sup>いま</sup> 今<sup>いつ</sup> も<sup>よよ</sup> 何<sup>よよ</sup> 時<sup>よよ</sup> も<sup>よよ</sup> 世<sup>よよ</sup> 世<sup>よよ</sup>



【 聖三祝文 】

せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、 せ い な る  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、 せ い  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 者 我 等 憐  
 め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅  
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を  
 殺 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、 )

【 提綱 (プロキメン) 生神女の歌第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり、

わ が た ま し い は し ゅ を あ が め、 わ が し ん は  
 我 靈 主 崇 我 神

か み わ が き ゅ う し ゅ を よ ろ こ べ り。  
 神 我 救 主 悦

誦經) <sup>けだしそのひ いや かえり いま のちばんせいわれ さいわい い</sup> 蓋 其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂わん、



わがたましいはしゅをあがめ、わがしんは  
我 靈 主 崇 我 神  
かみわがきゆうしゅをよろこべり。  
神 我 救 主 悦

誦經) <sup>わ たましい しゅ あが</sup> 我が靈は主を崇め、



わがしんはかみわがきゆうしゅをよろこべり。  
我 神 神 我 救 主 悦

【 使徒經 (アポストロス) 320 端 エウレイ書9章1節~7節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい だいいち やく ほうじ れい ち ぞく せいしよ けだしだいいち まく もう</sup> 兄弟よ、第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。蓋第一の幕は設け

<sup>そのうち とうだい あん きょうぜん パン これ せいしよ しょう だいに とぼり</sup> られて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。第二の帷の

<sup>うしろ しせいじょ しょう まく ここ きん こうろ あまね きん おお やくひつ</sup> 後に至聖所と稱する幕ありき。茲には金の香爐と、徧く金を蔽いたる約匱とあり、

<sup>そのうち おさ きん つぼ きざ つえ およ やく ひ そのうえ しょくざい</sup> 其内にマンナを藏めたる金の壺、アアロンの萌せる杖、及び約の碑あり、其上に贖罪

<sup>しょ おお こうえい これら こと いまつまびらか い もち これら ものか</sup> 所を覆える光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今詳に言うを庸いず。此等の物斯

<sup>そな だいいち まく しさいらつね い ほうじ おこな だいに まく ひとりしさいちょう</sup> く備わりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行ひ、第二の幕には獨司祭長

<sup>いちねん ひとたび ち たづさ い これ おのれ ためおよ たみ あやまち ため けん</sup> のみ、一年に一次、血を攜えざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻

ず。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには

金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べるができない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

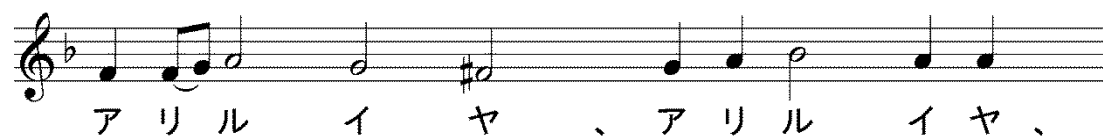
\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

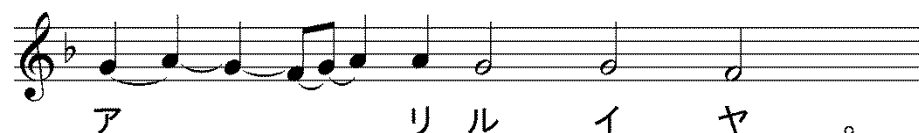
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第3調 生神女第8調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

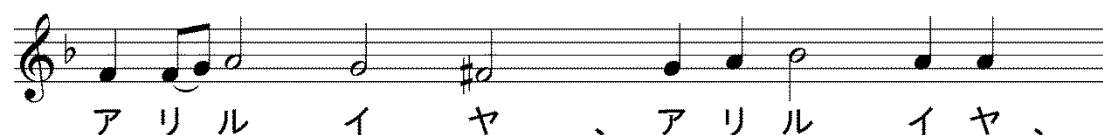


アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

誦經) <sup>ぢよ これ き これ み なんぢ みみ かたぶ</sup> 女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、

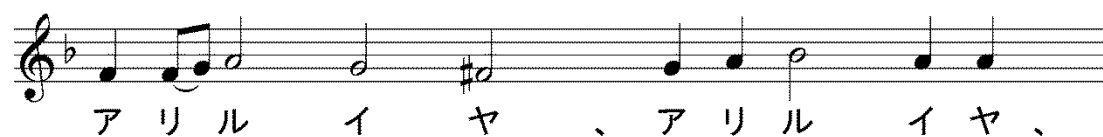


アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

誦經) <sup>みんちゆう と もの なんぢ かんばせ おが</sup> 民中の富める者は爾の顔を拜まん、



アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころ かみ し ちえ いぎよ ひかり かがや わ しねん</sup>人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 浄 き光 を輝 かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup>の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠 を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup>畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾 の喜ぶ 所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup>を思い且つ 行 いて、属 神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup>爾 は我が 靈 と體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup>て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮 を獻ず、今も何時も 世 世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 54 端 10 章 38~42 節、11 章 27~28 節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup>睿智、 肅 みて立て 聖 福 音 經 を聴くべし、 衆 人 に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>ルカ傳の 聖 福 音 經 の讀、



司祭) <sup>つつし き か とき かれら ゆ とき ひとつ むら い あるおんな</sup>謹 みて聴くべし、彼の 時、彼等が行ける 時、イイス ー の村に入りしに、或 婦 マル

<sup>な もの かれ そのいえ むか そのしまい な もの そく</sup>ファと名づくる者、彼を其 家 に迎 たり。其 姉 妹 にマリヤと名づくる者あり、イイスの 足

<sup>か ざ そのことば き きょうじ おお よ ころ わづら つ い</sup>下に坐して、其 言 を聴けり。マルファは 供 事 の多きに因りて 心 を 煩 わし、就きて曰 え

<sup>しゅ わ しまい われひとり のこ きょうじ なんぢい な これ めい</sup>り、主よ、我が 姉 妹、我一人を 遺 して 供 事 せしむるを 爾 意 と爲さざるか、之に 命 じて、

<sup>われ たす かれ こた い なんぢ おお こと</sup>我を 助 けしめよ。イイス 彼 に 答 えて曰 えり、マルファよ、マルファよ、 爾 は 多 くの 事 を

<sup>おもんばか ころ ろう しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ</sup>慮 りて 心 を 勞 せり、然れども 需 むる 所 は 一 のみ。マリヤは 善 き 分 を 擇 びたり、是

かれ うば べ これ い とき ひとり おんなたみ うち こえ あ かれ い なんぢ  
は彼より奪う可からず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾

はら はら なんぢ す ち さいわい かれ い しか かみ ことば き これ まも  
を孕みし腹と爾が嘯いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聴きて之を守

もの さいわい  
る者は福なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心を取りみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮  
はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ